
青猫 ~ 断章 ~ ?

大沢 綾子

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

青猫 ～断章～ ?

【Nコード】

N7975I

【作者名】

大沢 綾子

【あらすじ】

ペンシル型のビルの地下にある、BAR「青猫」
その扉には「MEN'S ONLY」のプレートが嵌め込まれている。

この短編は、その「青猫」を舞台にした作品です。
その店に訪れる人々の、そこで働く者たちの、さまざまな愛のかけ。

（前書き）

筆者が現在通っている文学学校においては、これはひじょうに突っ込みどころの多い文章になっていますが、しかし雰囲気がとても気に入っているために、つついそのまま掲載してしまいました。

青猫（断章）？

檜材の扉の前に立てば、小さくプレートが嵌めこまれている。

MEN'S ONLY

そこは、BAR『青猫』

ごく普通の、しかし男しか愛せない男だけがやってくる店。

営業時間は、午後六時から翌朝の五時にかけて　普通の繁華街とは客層のまったく違う通りのはずれあたりに建つ、ペンシル型のビルの地下にある。

通りに出された看板は、青い線描きの猫を横切るように「青猫」と書かれてあって、やわらかな光を放っていた。

地下への階段を降りて、その扉を抜けると落ち着いた広々とした空間が広がっている。淡い光はすべて間接照明で薄暗い。流れている音楽はいつも、シャンソンかジャズ。しかも、音量は静かに会話ができるように配慮されている。

扉から五段ほどの階段を降りると、そこは靴音を嫌うようにぶ厚い絨毯が敷かれている。左手にバー・カウンターがあり、右側には個別に仕切られ適当な距離を保ったテーブル席。猫の形をしたクリスタルの台座の上にはキャンドルが飾られていた。頼めばそのキャンドルに、二十代後半ぐらいのギャルソンが火を灯してくれた。

ここの従業員は、たったの三人。すらりと背の高いギャルソン服がぴたりとはまった青年と、カウンターの中間にいる鬚のきれいなマスターだ。もみあげから顎を覆うようにのばされた鬚は手入れが行き届き、細面の顔にインパクトを与えている。が、意外とひとを見る目のやさしい男で、眼尻のしわがその年齢を物語っていた。

そして、午前0時になるともう一人。

まるで映画に出てくる執事のような完璧なスタイルで、豊かな銀

髪を撫でつけた老人が奥の小部屋から現れる。痩せた背の高い老人で、年齢はおそらく六十代の後半から七十代前半。背筋のピシリとのびた、人生の風雪を耐えてきたような厳しさとやさしさを感じさせる眼をしていた。

この店に訪れる客はみな、彼がこの店の持ち主だ、と思いこんでいた。が、実際は違う。

彼はただの雇われ店長だった。しかし、実質的にその店だけでなく、ビルのテナントを管理しているのも彼だった。月に一度、彼は収支報告をメールで雇い主に送る。給料は、店の売上に関わらず支給される。

商売っ気はね、全然ないんだよ。

一年に一度ぐらいしか現れない彼の雇い主は、そう言って口説いた。場所は、パリのずいぶん場末のマイノリティしかこない薄汚れたパブだった。

七年ほど昔の話だ。

筒井は、ひさしぶりに店に行く、というその雇い主を迎えるために夕方早い時刻に店を開けた。看板は出さないままで、鍵だけをあける。目につくところをチェックして、手垢や埃をはらう。そうして、奥の部屋でクリーニングしたての「制服」に着替えた。

一年のこの一日が、筒井のたのしみだった。

カウンターの中にはいつて冷凍庫のなかを確かめる。そこには、その雇い主のためにだけ保存してある南極の氷が眠っている。二年ほど前に、友人がくれた、と送ってきた。その氷にアイスピックを入れるのは、今日が初めてだ。

そしてまた、思い出す。

当時の筒井は、ただ生活の糧としてそのパブで下働きの仕事をしていた。東洋人の老人に、パリの街はやさしくも、冷たくもなかった。筒井自身、そんな事を期待してもいなかった。ただ、日本に帰ったところで誰もいなかったから、船を降りた最後の土地に骨を埋めるつもりでいただけだ。ただ生きていくだけの、余生　そんな

つもりだった。

それを、雇い主が変えた。

パブの裏でビア樽を片づけているときに、声をかけられて筒井は驚いた。むろん、店のなかを掃除してまわっている間、その青年には気がついていない。ベトナム人やアフリカ系の黒人たちが多いなかで、彼は目立っていたからだ。

「あなた、日本人でしょう」

およそ、十数年ぶりに聞いた日本語だった。そして、はっとするほど爽やかな青年の笑顔だった。真夜中だというのに、まるで太陽の柔らかい日差しが差したかのようだった。

「そうですが。なぜ、おわかりになりました？」

筒井が日本語で答えると、彼は心底うれしそうにさらに微笑みを深くしていた。よく見れば、全体的に鋭い顔立ちなのだが、そんな風には感じさせない。細身の長身は、薄手のセーターとジーンズに包まれて、雰囲気があった。

「さつき、散らばったナッツの殻をね……掃除しながら、日本語で呟いていた」

筒井の漏らした悪態が、あまりに美しい日本語だったから感動してしまった、と彼はあいかわらず微笑したまま言った。

その夜から三日間、彼は筒井を口説きつづけた。

もちろん、おかしな意味ではなく 店長として雇いたい、と。

筒井がそれを受け入れたのは、青年のもつ人間としての魅力とどうせ失うものなど何もない生活、そして諾というまで通いそうな彼の熱意のためだった。

こんな、六十を越えたような年寄りを騙したところで得があるとも思えない。十代、二十代の頃の筒井なら売り飛ばされもしようがすでに老いてしまったこの身からでは、臓器をとるといつても、むしろ欲しいぐらいの立場なのだ。

「日本に着いたら、ここに電話をして」

渡されたのは、薄い名刺が一枚。

裏の白紙に、青年は連絡先として日本人の名前と電話番号を書いた。筒井にとつては、もう忘れかけたような日本の文字だった。じぶんが日本人だという事を片時も忘れたことはなかったが、その懐かしさに郷愁をそそられていた。

「誰かがあなたを迎えに来て、そのビルに連れていってくれる。それで、その店を気に行ったら全部まとめて管理してくれないかな」

筒井は、まるでマフィアのやり口のようにだと思いつながら、彼に訊いた。

「どんな店なのか、なぜ自分がやらないのか、そしてなぜこんな年寄りなのか。」

青年は、いちいち丁寧に答えてくれた。

「どんな店かといえば……男同士の出会いのための店だよ。俺はただ、そこでならちよつとぐらいキスをしてても咎められない場所があればね、と思うだけ。そして、なんで俺がやらないか？ だって、無理なんだ。俺はそもそも日本に滅多にいないから。俺は、これでも真面目に働いてるんだよ、筒井さん」

最後の質問は、筒井にとつては最も大事だった。

「こんなに簡単に他人を信用して 筒井がその気になれば、日本に着いて行方をくまますこともできるし、そのビルを丸ごと自分のものにしてしまう事も出来るのだ。」

「さあ……なぜかな。たぶん、あなたの日本語の美しさのせいだろうね」

「たった、それだけなのか。」

長年いろいろな人々を見てきた筒井でさえ、その理由には驚いた。しかし、結果としては青年は正しい選択をしたし、筒井もやっと安住の地を手に入れた。

ふと、昔を思い出すのをやめて 筒井は店内の時計を見る。あと半時間ほどで、約束の時間だ、と筒井はオードブルの用意を始めた。

筒井は、たしかにその青年が好きだった。自分にもしも子供がいれば、彼だったかもしれない、という意味で好きだった。

自宅から持ってきた生ハムをガラスの器に盛って、クラッカーにクリームチーズを塗ると、色どりのいい野菜をトッピングしていく。その手つきは器用で無駄がない。

筒井は昔、豪華客船に乗っていた。

若いころに日本を飛び出して、二十代の半ばには、船のなかにあるラウンジのひとつでバーテンダーとして勤務していた。覚えたカクテルの数も、簡単な料理の種類も、半端ではない。英語はもちろん、フランス語もイタリア語も話せた。

そして 簡単な単語だけならロシア語も。

彼の雇い主は、来ると必ず筒井に船員時代の話をひとつ、せがむ。そういう点、筒井は青年に負けず劣らず話題の宝庫だった。なにしろ、上流階級のパーティーが毎夜行われているかのような船だったからだ。

マフィアの一団が、大挙して乗り込んできたこともあった。

派手で陽気で、喧嘩っぱやいシチリア人気質というものも、筒井は船で堪能した。

静かに扉のひらく音がして、筒井は、入口に視線をやるとカウンターから出ていた。

「いらっしゃいませ」

浅い春に合わせるように、青年は白いオックスフォード・シャツの襟を立てて、ブルー・ジーンズの上にぎっくりとバーバリーのトレンチを羽織っていた。すでに、三十も半ばを越えているはずだが、それよりも若くみえる。また、どこか暑い国にでもいたのだろうか、筒井はその浅黒く日焼けした顔を見て思う。

「……来たよ」

「お待ちしておりました」

コートを受取ってハンガーにかけると、筒井はカウンターに案内

する。

「なにも困ったことはない？」

「ごじやいませんよ」

青年の問いに丁寧な口調で答えながら、筒井はふたたびカウンターの中にはいる。そうして、去年彼から預かっていたコニヤツクの瓶を取り出していた。

シャトー・ポーレのボルドリ。

このコニヤツクを、あろうことが青年はロツクで呑む。フランス人が聞けば、泣くどころか発狂するような所業だ。もっとも、その氷が南極で一万年も眠っていたものだと思えば、贅沢きわまりないカウンターの上にオードブルの皿と、コニヤツクのロツクを置いて筒井はかしこまった。

手のひらのなかで温めて、たちのぼる香りを楽しむのがコニヤツクの正しい飲み方だ。ボルドリは、豊かな花のような芳香を放ってさらに楽しませる。氷を入れてしまえば、その楽しみは薄れてしまう。

が、青年はかならず一杯目はロツク。

理由は、アルコール度数が高いから。ボルドリは、四十七度もある。

「今回は、どちら方面を歩かれました？」

「相変わらずだよ……ああ、でも去年の夏にはシベリアにいたね」

彼の職業は、国際資格をもつ同時通訳士　バイリンガルどころか、話すだけなら片手で足りないほどの言語を操る。たいていは、企業もしくは大学の学術チームと仕事をしている。

「……夏でも、寒かった」

青年の言葉に、筒井は笑っていた。

彼がこのビルを管理しないのは、そのためだった。

その方面ではすでに十年を超えるキャリアを持っている。通訳という仕事が好きで、世界中をとびまわっていた。その彼になぜか、父親がビルを居抜きで買ってよこしたらしい。しかし、その気がま

つたくなかった彼は、ずっと「人物」を探していた。

そして、筒井に白羽の矢が立てられた。

「今日は、どんな話を聞かせてくれる？」

クラッカーをつまんだままで、青年が言う。

筒井はすこし考えて　口をひらいた。

「さきほど、シベリアの名前が出ましたからね……私の、恋の話でもお話ししましょうか」

一九六〇年代の筒井は、三十代だった。

東洋人は若くみられて、しかもかなり整った顔立ちをしていた筒井は、せいぜい二十歳ぐらいにしか欧米人には見られていなかった。日本人としては背が高く、頭が小さいバランスのとれていた筒井はある意味では、火遊びの対象としてはモテる男だった。が、そんな浮き名を流すほど器用な男ではなく、むしろ、日本人らしい礼儀正しさと冷ややかさももっていた。

それに、筒井は、ゲイだった。

船に乗るようになる前、カリフォルニアに住んでいたときに自分がそうだと気がついた。そもそも、筒井が船での仕事になんとかもぐりこんだのも、当時の男の嫉妬から逃れるためだった。そうして、ずっと根無し草のように流れつづけて三十の声を聞いた。

その歳になってもどこに落ち着こうという気もなかったし、筒井は「誰か」を欲しいと思ったこともないような男だった。船が港について上陸許可が下りれば、筒井はそういう界限に足をむけて、誰かを買った。

そんな自分に、筒井は充分満足していた。

が、その年だけはちがった。

北太平洋航路の客船に、その青年がロンドンから乗船してきたのはまだ寒い春だった。ロンドンには霧ではなくスモッグに霞んでいた。淡いブロンドと、目の覚めるような青い瞳をしたハンサムな青年は、

毎夜のように筒井がつめていたラウンジにやってきた。日本は高度成長期で、アメリカはベトナムに対して北爆を開始したばかりの頃だ。

仕立てのいい服を着て、物腰も優雅で上品な青年だった。英国なまりのイングリッシュを話して、その声は甘いテノール。名前を、アレクセイ・ワイリーだと教えてくれた。

「英語だと、アレックスだよ」

えらくざつくばらんに話しかけると思っていたら、アレックスは筒井をてつきり年下の坊やだと思いきりこんでいたのだ。間違いに気づいたときのアレックスは、二十四歳の青年らしい初々しさで謝っていた。

それがきっかけて、筒井はアレックスと親しくなった。

アレックスは、ロンドンの大学院を終えてアメリカにいる両親の元に帰るところだと教えてくれた。息子をこんな三ヶ月もの航海をする客船の、しかも一等船室に乗せる親だ。アレックスは、いかにも大事にされた良家のお坊ちゃんという感じにおっとりしていた。アルコールがほどよく回ってくると、彼は会話のなかに耳慣れない単語を混じらせた。そのことを筒井が訊ねてみると、アレックスはじぶんの祖父が帝政ロシア時代の生き残りなのだ、と言っていた。

「ロシアの、亡命貴族でございますか？」

「うん……そうらしいけど」

家系図が、家にあるらしい。それは、なんの縁故もなく家族のほとんどを空襲でやられてしまった筒井にとっては、羨ましい話だった。筒井は、戦災孤児 神戸の大空襲でのきなみやられた。終戦の年、筒井は十歳ほどの子供である。

アレックスのすべてが、妬みではなく 甘いあこがれを筒井の胸に湧き上がらせる。そういう好意は、無言のうちにも伝わるのだろう。アレックスは、ラウンジに通い始めて数日後には、筒井めあてにカウンターに座るようになっていた。

そして当然、カウンターに毎夜やってくるアレックスとの会話を

筒井はたのしんだ。

乗客と船員たちとの恋は、禁止されている。が、それでもやはり、まったく何もないことはない。実際、結婚をしてしまった、という一等航海士や水夫たちも多かった。

が、さすがに筒井はそこまで期待はしない。

なにかの拍子にかわいいと思いはしても、きちんと一線だけは引いて対応しつづけた。これまで苦勞してきた筒井から見れば、六歳という歳の差はその倍ぐらいに感じられたからだ。

たいていのアレックスは、行儀のいい青年だった。ハンサムで、裕福な家庭で育つてきちんと躰けられていて、年頃の娘をもつ親ならば好ましいと思うタイプだった。必然的に、彼はあちこちの家族連れのテーブルに招ばれる事になった。

昼食はアメリカ商人のテーブルに、夕食はイタリアの家族連れ

いにかげん一人になりたい、とアレックスはいつも筒井の前で控えめにこぼしていた。

「デッキで夜の散歩などはなさらないんですか？」

彼が申し込めば、よろこんで娘を部屋から出す親は多いと思われる。筒井がそう思って訊くと、アレックスはどこかが痛んだように顔をしかめる。

「……興味ないよ、そんなの。それより、ここがいい。だって、好きだけ一人でいさせてくれるもの」

じゃあ、私も黙っていきましょうか、と筒井が言うとアレックスは慌てたみたいに首を振る。

「僕は、あなたのちよつと掠れた声を聴いていると落ち着くんのだ」

筒井はただ、黙って微笑んだ。

カウンターを挟んでこちら側と、向こう側。

筒井と彼はそういう関係だった。穏やかで、わずかに親しみが通いあう。が、別世界の住人だと筒井にはわかっていた。

その上で、彼とのつかの間の時間を楽しんでいた。

なのに、アレックスは航海が一ヶ月を越える頃になると、たび

たび悪酔いをしては筒井にからむようになった。その様子は、なぜか駄々をこねているような、焦れて地団駄を踏んでいる子供のようにだった。

「お客様……ワイリー様？」

何度目かにカウンターにつつぷしてしまったアレックスに、同僚から目配せをされて筒井は中から出てきて声をかけた。

「……アレクセイだよ」

不機嫌そうにもごもごこと、声が返ってくる。筒井はため息をついて、言われた通りに呼びかけなおした。

「私がお部屋までお送りいたしますから、ここを出しましょう」

手を貸すそぶりをすると、その夜アレックスは素直に従った。筒井よりも高い身長で寄りかかって抱き支えられながら、歩き始めた。バーテンダーとはいえ、船で働いている以上は筒井もいざ海が時化るとなればやるべき仕事を割り当てられている。ほかの船員たちと同じように、日ごろから鍛えてある身体は、アレックスを支えてもびくともしなかった。

一等船室など、筒井は滅多に入ったこともない。

キャビンの窓からは、夜の海が感じられた。どこにも灯りがなく海上では、海は見えない。ただ、その広大な暗闇を感じるだけだ。

ひろいベッド、贅沢な浴室、ボルトで留められた家具も一流品だった。

酔っ払ったアレックスを部屋に運んで、やっとのことでベッドに寝かせる。さすがに筒井も、額にうつすら汗をかいていた。金髪につつまれた頭の下に手を差し込んで持ち上げると、羽根枕をあてがってやった。

その作業をしている胸の下で、アレックスが囁いていた。

「……アスカ？」

アレックスは、いつだか筒井が教えたファースト・ネームを掠れた声で呼んでいた。

「ここにいてよ」

そつと、ベストの胸元を掴むアレックスの手を、筒井は無表情のままではずしていた。そうして黙って足元にまわると、靴紐を解いて靴を脱がせる。それは、筒井の仕事ではなかった。彼はバーテンダーで、部屋つきの侍女ではない。それを言うならば、そもそも彼をキャビンまで送ってきたことも、筒井の仕事ではなかった。

が、筒井はそうした。

「ねえ……行ってしまわないで。そばにいて」

「酔って、ホーム・シックにでもかかりましたか」

ベッドの脇に立って、筒井は静かに、いくぶん冷やかな態度で見下ろしていた。灯りのしたで枕にひろがった金髪が、きらきらと輝いている。涙をはった瞳が、逆光のためか眩しそうに筒井を見上げていた。その美しさに、筒井は見惚れていた。

「……ちがう」

「気分がお悪いですか？　まだお若いからといって、毎夜あんな風に呑まれたら、すぐに身体を壊しますよ」

ゆっくり、アレックスが首をふって否定する。

「いてよ……ここに」

「私には、まだ仕事があるんですよ。戻らなければ」

とうとう、悲しそうにアレックスが目を閉じる。その拍子にぼろりと涙の粒がまなじりをつたっていった。

「僕は……アスカが欲しいんだ」

なにを馬鹿な　　と言いかけた筒井の口は、とうとう開かなかった。

「だから、そばにいて」

おずおずとのばされた手が、筒井の指さきに触れる。逃げない、とわかってアレックスが絡めてきた。その手を、意外なほどの力で筒井は握り返す。筒井のなかの矜持が崩れた瞬間だった。

「仕事が、あるんですよ……」

掠れた声で言いながら、筒井は覆いかぶさるように手をついて身体をかめると、アレックスのばら色のくちびるに小さなキスをし

た。それだけで身を離そうとすると、アレックスの手がうなじにまわって留められていた。

貪欲でせつなくちづけを交わす。

互いに相手を貪って、やっと安堵と落胆のこもったため息が部屋に落ちる。

「……………どうしても、戻るんだね」

見上げてくる青い瞳のうつくしさに、筒井はしばらく見惚れていた。

「ええ……………でも、明日の昼ごろお伺いいたします」

筒井はそう、約束してアレックスから離れていた。

それからの残された日々は、筒井にとっては甘やかでやさしく、そして悲しみの予感をはらんだものだった。

会えるのはいつも昼間。狭い船内では、わずかな時間の逢瀬でも危険きわまりない。

人目をしのでアレックスと会い、そしてその身体を腕に抱いてでも、ずっと一緒にいるわけにはいかない、お互いわかっていた。

筒井はアレックスが心のどこかで望むように、船を降りることを考えたりしなかった。それにロンドンと違い、アメリカはさらに日本人に対してあたりがきつかった。

無理もない。当時はまだ、日本人によって肉親を殺された、という遺族が多すぎたのだ。それは、何かの拍子に噴出する。筒井がゲイで、しかも白人の上流階級の青年をたぶらかした、とわかったら血祭りにあげられるのは筒井だ。それが怖いというよりも、筒井はそのことで傷つくアレックスが怖かった。

「僕は、アスカがいないと生きていけない……………」

そんなことはない。

「きつと、あなたに似合う相手がどこかで待っている」

しかしきつと、この日々を忘れることだけはない、とお互いに確かめあった。心のなかに沈めて 確かにあったことだと、覚えて

いる。

我を忘れたときにそのくちびるから洩れる、うわごとのような口シア語の単語を覚えている。

「キスをして……キスをして、アスカ」

入港する前日の昼間、ひろいベッドの上でアレックスは筒井の身体の下で、悲哀とともにそうせがんで泣いた。明日は、絶対に泣かない　　そういう約束の上で。

なのに　　下船していくタラップの途中で振り向いて、アレックスはやっぱり泣いていた。

「ふうん……」

と、話し終わった筒井のまえで青年が、手のひらに形のいい顎をのせて微笑していた。切れ長の双眸のなかにある漆黒の瞳は、やさしい。

「筒井さんは、あなたらしい恋をしたんだね……」

「そのようですよ」

「彼は、幸せになったかな？」

それは、筒井にはわからない。ただ、そう望むだけのことだ。

「俺の恋は、まだまだかな？」

それも、わからない。

筒井は目の前の青年の話を何度か訊いたが、いつも本気で恋をしていても、ギリギリのところまで本気ではない。その理由を筒井は知っている。通訳という仕事で彼が行くのは、安全な外国ではない。むしろ、誰も行かないような場所だから彼は進んで政情不安な国やテロが頻発しているような土地に行く。

自分の生死に自信がもてないから、彼は誰とも続けようとしないのだ。身動きできないしがらみを、彼は怖がっている。

「ところで……この店で幸せになった恋人たちはいる？」

その質問も、毎回彼の口から出てくることだった。

筒井は微笑んで、答えていた。

「」ございますよ……ひとつは、去年お話しした男性のその後ですが、どうやらお待ち合わせにもこの店をお使いにならなくなったご様子で。推察いたしますに、背の高い恋人と一緒に暮らしになっているのではないかと」

ああ、あの伝説の男ね　と青年が呟く。

「残念だなあ、一度でいいから顔を見たかったのに。ほかには？」

「そうですねえ……とても可愛いらしい恋人を見つけた青年がひとり、いらつしやいましたでしょうか。最初から、とてもいい雰囲気です。きつと、あちらも大丈夫でしょう」

「筒井さんが言うのなら、きつとそうだろうね」

まだある？　と青年が目で問いかけてくる。コニヤックは二杯目で、お作法通りに手の中で暖めながら楽しんでいた。

「これは、つい最近でございますが……」

と、筒井は友人同士らしい二人がきて、常連だった男のほうが悪心に口説いてすげなくされていた、と笑った。

「それは、幸せになった、とは言わないんじゃないの？」

「いいえ……きつと、大丈夫でございますよ。お二人で、仲良く出て行かれましたし、それきりその常連様はお越しになっておりませんから」

「来ないというのは、店にとっては痛手じゃないかなあ……」

俯いて、いかにも面白そうに青年が笑う。

しかし、そうやって来なくなる客がいる一方で、新たに訪れる客もいる。彼らのあいだでは口コミでBAR「青猫」の噂はひろがっている。そして、このネット社会にも関らず、誰もこの店を不特定多数に紹介しようとはしない。

大事に、ひっそりと置いておきたい店なのだ。

青年は、二杯目のコニヤックを飲み干していた。

暖めていたグラスを微かな音をさせてカウンターに置いて、スツールから立ち上がる。筒井があわててカウンターから出ようとする

と、いいんだ、と止められていた。

そうして、優雅でキレのいい身ごなしでトレンチに袖を通していった。

「ねえ、筒井さん……彼は、最後にこう言ったんじゃないかな？」

襟を立てて、あのお馴染みのバーバリィ・チェックをのぞかせる。

「なにを、でございますか？」

「ダスヴィダーニャ……アスカ」

青年の、甘みをふくんだ低い声が筒井の胸に沁みこんだ。

完璧な発音は、アレクセイを思い出させて、そして一瞬筒井をあ
の若かった頃に逆行させていた。

「また、来るよ」

カウンターの途中で深々と頭を下げながら、筒井は青年が消えたし
まったあともしばらく面をあげられないままだった。

(F I N)

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7975i/>

青猫 ~断章~ ?

2010年10月8日15時13分発行